

こまちの 農業記



湯沢中央支店 山田宮沢地区
井上 信秀さん(42歳)

肥育牛

なごり雪と言うには、本格的な雪。3月10日の午後、確定申告作業にも追われ、忙しい井上さんをお願いし、240頭の黒毛和牛と対面してきました。

井上信秀さん：

本格的に就農して、12年目を迎えた井上信秀さん。一頭一頭性格が違うという240頭の牛達と会話をしながら体調を確認するのが毎日の日課です。信秀さんが大好きで、「遊ぼう」と言わんばかりに角でツンツンする牛くんがいたり、気の抜けない毎日です。また、こまちWCS(稲発酵粗飼料)組合の組合長を務め、自家用は勿論、地域のWCS供給基地として40畝の水田で受託栽培に取り組んでいます。

肥育牛の飼育1

井上家で、肥育牛を始めたのは、父の信雄(66歳)さん。信秀さんは2代目になります。2人の従業員を雇用しながら、肥育をしています。毎月12頭の子牛を購入し、12頭の肥育された牛を出荷します。子牛購入から出荷までは、20カ月かかります。つまり12頭×20カ月が240頭という頭数になります。

月に1度は、信秀さんか父の信雄さんのどちらかが由利市場や岩手の市場に足を運び、子牛を買い付けます。購入のポイントには、体重が重く、尾枕がない(尾っぱに油が浮いていない)子牛を選ぶことだそうです。一目で子牛を選ぶ重要な仕事です。

主な出荷先である横浜食肉市場へも毎月必ず出向きます。「市場で直接仕入れる情報が大事」と信秀さんは話します。井上家から出荷される牛には、固定落札者が付いており、肉色が良いと信頼を得ています。「WCSをあたえていることが良いと思う」と信秀さんは分析しています。

肥育牛の飼育2

肥育の上で一番大切なのは、牛の体調管理です。畜舎を回り、餌の食べ残しがあるかどうかをポイントに目を配ります。春から夏、秋と無農薬栽培米やWCSの栽培と農作業が重なる時期は、畜舎を回る時間が限られてきますが、集中力をもって観察するように心がけているそうです。逆に冬場からのこの時期は、日に何度も畜舎に足を運ぶことが出来、信秀さんも牛達も安心です。

飼料高、販売価格の低迷…と肥育牛はもとより、畜産を営むには、厳しい時期が続いていますが、(牛糞を利用した)堆肥を活用した無農薬米の栽培や、WCSの受託など肥育牛飼育を行うことにつながる営農活動があると信秀さんは思っています。

今後は・・・

今年、飼料米を与える計画もしているそうで「飼料の自給率を高め、付加価値のある肉牛の販売をしたい」と意気込みを話しつつ、「農政も農業も変換期を迎えた今をしっかりと見極めていきたい」と柔軟な姿勢で農業のこれからを見つめます。

今日の表紙

春の花は何色!?

水仙



「春の花」と言ったらやはり桜ですかね。ある調査で春の花色を質問したところ、ピンクと答えた人が最も多かったそうです。やはり桜のイメージが強いからです。

春は、「水仙」「菜の花」「つくし」…多くの草花が日常を彩ります。皆さんの春色を探しに出かけませんか。

撮影日 平成21年4月
撮影場所 湯沢市 愛宕公園